

人生逃げ場なし

—素直な心になる修行も始めよう—

開倫塾

塾長 林 明夫

『自分が逃げられないということは、自分と同時に人をも生かすことになる。逃げられないからこそ、いたらない中で本当の出会いがあり、人をもおのれをも生かす絆（きずな）が生まれてくる。どん底で逃げようとすればするほど、苦しみが追いかけてくる。苦しみの正体は、そういうものだと思う。

逃げないで、そこに我が身を投げ打てば、苦しみがあたたかく抱いてくれる。それさえわかれば逃げる必要はない。逃げる方が危険で、逃げない方がむしろ安全なのだ。逃げたら救われると思っても、結局いつも追われる身になる。逃げずに、そこで耐えることを体験することが大切なのだ。

ある方が、「実は私も逃げないということで身につまされた経験があります」と、涙ながらに話されたことがある。その方は、何年前に、自分の店を自分のところの失火で全焼した。それだけならまだしも、となりの店まで類焼させ、そこで留守番をしていたおばあさんが焼死した。

いろいろないきさつはあったが、いずれにしても商売を始めなければ生活のメドが立たない。気持ちの上では、どうしてもとなりのおばあさんを亡くした場所では店を出せない。どこか手頃なところはないかと思って、人にも頼んでいろいろ物色したけれども、その場所についているつながり、信用にまさるものはない。

そのうちに、となりのおばあさんを亡くしておいて、自分だけその場所から逃げ出すのは、いかにも卑怯ではないかと気がついた。そこで心を入れかえ、自分の店のことはさておき、となりの店の再建のためにお金も出し、できるだけの手伝いをした。となりの人は恨みも忘れて、「本当にこんなことまでしていただいて、亡くなった年寄りの供養になります」と、心から喜んで、りっぱに店を再建された。

それを見届けてから、さて自分の店の再建をと思ったが、もう資金も底をつき、途方に暮れていると、昔の友だちがたくさん駆けつけて、「あんたの店の事情はよくわかっている。となりの店のためにすばらしいことをしてくれた。でも、本当は困っているんだらう。今度はオレたちがキミの力になるら」といって、何人もの友だちが出資をしてくれた。「今の私の店は、こういう友だちのおかげでできたのです。あのとき本当にここから逃げ出さなくてよかったと思っています。」といって、涙をこぼして感謝をされていた。

この方のように、長い人生の間には、思いがけない災難に遭うことは多い。そのとき人から守られ、人から生かされる。そして、人をも生かしうる生き方ができなければならない。そういう生きざまが、一人一人の生き方、毎日の経営の根底にあれば、どんな苦しみにも耐えられるのではないだろうか。

人間の一生にはいいこもあるし、悪いこもある。喜びや悲しみをまぜた中でさまざまな経験

を重ねていく、そういうなかで、損だとわかっていることにも誠実に対処していくということは、いわゆるあとしまつがきちんとできるということだ。

あとしまつせず次のことを考えてもだれも信用してくれない。大切なのは、あとしまつをすることだ。そういう自分を投げ出した仕事を、周りの人はじっと見ている。そのとき生まれた信用は絶対になくならない。困っているときにこそ誠実な生きざまが必要となる。

長い不況で、ずいぶん苦勞されている方が多いと思う。けれども不景気だからといって、うろたえたり騒いだりする必要はない。しっかりと足もとを見つめて、損をしたらその損にできるだけ誠実に尽くしてみることが、「人生逃げ場なし」ということに対する一つのあり方ではないだろうか。

わたしの師匠がよく「進むにも、退くにも道がある」といわれた。進む道はだれでもよく知っている。けれども、退く道もあることは、あまり知らない。しかし、進むのも退くのも、いつも真心を尽くすという一本ずつ通った道しかない。失敗したとき、損をしたときに誠実を尽くせば、自分が進もうとしなくても、必ず進むべき道が準備される。

不景気ときには、景気のよいときには学べない教えがある。そういうものを落ち着いて学んでみる姿勢が大切だ。いつも逃げ腰の人も、逃げられないことを覚悟すると、大盤石（ばんじゃく）になる。逃げないで仕事の教えてくれるものを謙虚（けんきょ）に学んでいくことが、不景気を克服する最良の生き方だと思う。』

*以上、『ベスト・ライフ』石川洋著、実業の日本社 昭和 58 年 10 月刊 54 ~ 58 ページより引用

1. 長い引用となりましたが、この文は、私が尊敬してやまない京都・山科（やましな）にある一燈園（いっとうえん）の石川洋（よう）先生の御著書からのものです。「素直な心は、人を強く正しく聡明にすると私は考えています。そのために、常々から素直な心になる修行というものが必要だと思うのです。そのような意味で本書からは実に多くの修行の糧が得られると思います」と松下電気の創業者故松下幸之助さんも石川洋先生のこの本をすすめています。開倫塾の塾生の皆様もふだんの教科の勉強他に、心の勉強、精神の修行もこれから意識的に行ってほしいと希望します。そのために、どのようにしたらよいか、今回は考えましょう。

(1) 人の話を静かに最後まで聴く訓練をする。立派な人物とみんなから言われている人の話は、積極的に聴きに行く。TVやラジオの番組欄も注目し、好きな人の話をできるだけ聴くようにする。話はメモを取りながら聴くとよい。

(2) 幅広い読書をする。古くから読みつがれている本はとりわけ注目し、どんどん読みすすめる。感銘を受けた文章は、ノートに書き写しておく。気に入った本は何回も読むクセをつける。

(3) 家の手伝い、学校での作業、地域での奉仕活動は自然な形でどんどん行う。

(4) 「よいことをして忘れる」「他人の悪口は言わない」「グチは口にしない」訓練をする。

(5) 身体を鍛える。強い体をつくる。自分一人のできる身体の鍛錬方法を早く身につけ、毎日決ま

った時間に行う。

2. 21世紀は、本格的な「心」「精神」の時代に入ります。衣食足りて礼節の時代となります。「精神と自然」が人類史上最も大事にされる時代に入るかも知れません。どのようなことがあっても目の前の現実から逃げることなく、人間として生き抜いてほしい。そのために今から精神の勉強も怠らないでほしいと希望します。